令和　2　年度

1　自己評価及び外部評価結果

事業所名　：　　グループホーム　さくら花泉　A棟

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	0390900090		
法人名	有限会社　さくら		
事業所名	グループホーム　さくら花泉　A棟		
所在地	〒029-3105　岩手県一関市花泉町涌津字二ノ町43－1		
自己評価作成日	令和2年7月30日	評価結果市町村受理日	令和2年10月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人　いわての保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871　岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和2年9月8日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

利用者様の声に耳を傾け、利用者様と職員との関係性を密にできるように心掛けている。多くの職員は、自宅にいるような雰囲気を心掛け、食事も、季節の野菜をふんだんに使用し、味わってもらうようにしている。職員間では、棟チーフを中心に、常に、どうすれば利用者様たちがそれぞれ自立した、日常生活が継続できるのか、また、どう対応していけば、自尊心を傷つけずに、介助を行っていけるのかを話し合っている。また、現在、看取りを抱えており、状態が低下していく中で、自分たちの持っている知識を生かしながら、最善のケアを心掛けている。毎年4月には、職員に施設目標を考えてもらい、選ばれたものを施設の目標としている。昨年は、『誰のための介護かを考え、出来る事を奪わない、それが私たちの合言葉』、本年度は『その言葉遣いは大丈夫？利用者様のための介護を考え、注意、指摘ができる職場を目指そう』と常に利用者様の事を考えた目標になっており、それぞれが、目標の意味を考えながら日々ケアを行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

事業所では、利用者の目線で対応し、お手伝い、外出、食事などの要望を聴き取り、家族や利用者の意向に沿った介護サービスを提供し、家族に対しても、施設の活動状況紙「さくらだより」と居室担当と施設長とで利用者の生活状況を記した「家族連絡表」とを毎月お送りしている。また、終末期のケアは、かかりつけ医や訪問診療医師との連携のもと、家族や利用者の要望に沿って施設内での看取りや医療機関への移送等を実施するなど、利用者の安心と家族の信頼を得ている。事業所運営に当たっては、各地区の区長や民生委員等を運営推進会議の委員に委嘱し、地域との交流や避難訓練に対する提言を頂いているほか、職員会議等において職員の提案を受け入れ、行事の開催や介護方策などの改善を進めるとともに、各種研修会の開催及び参加、介護の資格取得への支援を行うなど、働きやすい環境の下、職員の知識の習得や技術の向上を図り、より充実した介護サービスの提供に努めている。

Ⅴ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる （参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
			2. 利用者の2/3くらいの
		○	3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある （参考項目：18,38）		1. 毎日ある
		○	2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている （参考項目：38）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている （参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている （参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
		○	4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている （参考項目：30,31）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている （参考項目：28）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている （参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
			2. 家族の2/3くらいと
		○	3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている （参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
			3. たまに
		○	4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている （参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている （参考項目：11,12）		1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
		○	3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
		○	2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

令和　2　年度　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　**2　自己評価および外部評価結果**

事業所名　：　グループホーム　さくら花泉　A棟

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	（1）	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎年、職員から募集した施設目標を棟に表示し、その目標に向かって日々努力をしている。1年をかけて、目標の達成が行えるように、職員も常に他の職員の言動に注意を払い、指摘ができる環境を作り、お互いがより良いケアの実践ができるようにしている。	法人の理念やグループホームの理念のもと、職員から提案を募り、年間の施設目標を職員も参加して定めている。職員会議等で施設目標を常に確認し合いながら、利用者への日々の介護サービスの向上に努めている。	施設目標の選定に当たっては、法人やグループホームの理念の目指すところを吟味したうえで、職員がこれを具体的に実践する取り組みの項目や方策について、検討されることを期待します
2	（2）	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年はコロナの影響で、地域のお祭りや行事などが軒並み中止されてしまい、現在は、ほとんど施設の外に出ていく事が出来ていない。昨年までは、地域の行事に参加し、また、地域の方々に来て頂けるように定期的に行事を開催していた。	地域の自治会への加入や老人クラブとのお付き合いなど、地域との交流を積極的に行っているが、例年開催している芋の子会や地域との餅つき会などは、コロナ禍のため、本年度は施設内の利用者や職員のみでと考えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2ヶ月に1回、地域の方々が集まりやすい場所をお借りして、認知症カフェを開催している。また、施設内の行事に参加して頂き、実際に認知症の方と接して頂く事で、認知症状の理解をして頂けるようにしている。		
4	（3）	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度に入り、運営推進会議も中止している状況。昨年は、運営推進会議で、職員の人員が不足している事などを伝え、その中でどう利用者様との時間を作っていくのが良いのか、又、人員確保の手段なども話し合っている。	コロナ禍のため、本年4月と6月は運営推進会議を中止したが、8月から再開している。委員からは、様々な地域との交流に関する助言、提言のほか、避難訓練へも参加していただいている。委員の助言等は事業所の運営に反映されている。	
5	（4）	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	生活保護の担当者様や支所の窓口の方々とは、手続きなどで、日々顔を合わせている事で、常に相談ができる関係が出来ている。	運営推進会議には、市の福祉担当者か地域包括支援センターの職員が年度交代で参加し、助言、指導を頂いているほか、事業所として、行政主催の研修会や集団指導会にも参加している。市とは利用状況や入居希望者に関連する情報を交換するなど、常に関わりを持っており、避難情報等は防災ラジオを通じ把握している。	

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 ： グループホーム さくら花泉 A棟

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設内で身体拘束と虐待の研修を行い、一つ一つの言動に関して、拘束や虐待に値している事を、職員同士が指摘をしている。また、研修では、施設内で起こりそうな虐待や身体拘束の例を挙げ、それに対して、職員はどう対応していくのか、発表をしてもらっているが、全員が同じように理解しているわけではないので、定期的に研修を継続している。毎月の棟ミーテイングでも、身体拘束を行っていない事を確認している。	法人主催の勉強会に出席しているほか、施設内でも事例等の発表の機会を持ちながら研修を重ね、職員への趣旨の徹底を図っている。スピーチロックなどは、その都度、注意し合い、意識を喚起している。身体拘束の事例はなく、玄関の施錠も夜間のみで、離床確認のためのセンサーは数名が利用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	身体拘束と虐待は、表裏一体のものなので、拘束の研修と合わせて行っている。虐待に関しては、通報義務もある事も合わせて伝えている。地域性もあると思うが、どうしても言葉が強い時があり、その都度、もう少し、声のトーンを落とす、ゆっくり伝える、柔らかな言葉遣いをするように指導している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在は、施設内で権利擁護や日常生活支援事業を使っている方が居られず、また、研修などに職員を出す事が出来ていない。職員も権利擁護の事はわかっておらず、今後施設内の研修を包括に依頼し、スキルアップを図る必要性がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前に、一度施設を見学して頂いてから、契約を行っている。見学時にも不安な事や今後の生活に関して話をし、納得して頂いてから契約を行っている。心配な事や不安な事なども、随時、ご相談が出来る事をお伝えしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時に、ご家族の要望をお聞きし、出来るだけ要望に応えられるようにしている。また、利用者様からは、外出や外食の希望が多く、今年に入ってからは、我慢をして頂く事が多くなっているが、苑庭での食事やおやつなど、出来る範囲内で希望に沿うようにしている。	家族の来所の際に意見等を聴き取っているほか、「さくらだより」や「家族連絡表」により、利用者の生活状況をお知らせし、要望等を伺っている。利用者の意向は、利用者目線で対応することにより把握するよう事業所内で徹底している。お手伝い、外出又は食事などに関する要望は、本人の意向に沿った対応に努めている。	

令和 2 年度　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2 自己評価および外部評価結果

事業所名 ： グループホーム さくら花泉 A棟

自己	外部	項 目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	外部評価 次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	棟ミーティングや会議で出された意見を、本社で行う管理者会議で報告をしている。また、1年に1回、福祉部長との面談を行い、直接自分の意見を伝えることが出来る。	年1回の法人本部役員との面談、月1回の棟ミーティング時や随時に把握した職員の提案を活かし、行事の開催や介護方法を業務の改善に活かしている。職員の要望する勤務形態や資格取得などは、意見、要望に沿うよう配慮しているほか、研修受講の費用については、法人で助成する制度を設けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	初任者研修や介護福祉士の資格を取得したものは、書類を提出することで、資格手当をもらう事が出来る。また、資格取得の後には、研修費として会社より補助が出ている。また、普段の仕事の状況を見て、随時、正社員登用を行い、、積極的に資格取得を進めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	中途採用の方は、ある程度、経験があり、施設形態が違ったりすることで戸惑う事が多い。また、グループホームの特徴を生かせるような、ケアの方法や、意向に沿ったケアを行うようにする事などを習得してもらっている。また、現職の職員には、スキルに合わせて、外部の研修に参加してもらっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス協会に加入しているが、研修は盛岡市が多く、参加は厳しい状況。しかし、近隣のグループホームの管理者とは、連絡を取り合い、お互いに困っている事などを話し合っている。本来であれば、今年度より、認知症カフェへの参加を通じて、お互いに施設を見学し、意見の交換が出来れば良いと考えていたが、コロナの影響で出来ていない。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	居宅のケアマネや医療連携室から、協力を頂き、入居前にホームを見学して頂き、納得されてから入居へ繋げている。その後、実調に伺い、ご本人やご家族の話を細かく伺う事で、入所後の不安を減らせるように努めている。		

令和 2 年度　　　　　　　　　　　　　　　　　2 自己評価および外部評価結果

事業所名 ： グループホーム さくら花泉 A棟

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	外部評価 次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前に、ご本人の情報、要望をシートに記入して頂いている。自宅や病院に伺い、本人や家族の希望や不安、率直な意見を聞き、安心して入所できるように、心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	居宅ケアマネ、ご本人、ご家族と話し合い、その時に必要なサービスとニーズを見極めて、今のサービスが適正なのか判断するように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様が自主的に職員の手伝いを行ってくれている。職員からではなく、利用者様がやりたいと思える事をして頂く事で、一方的な支援にならないように心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会、外出などは、自由に行って頂いている。家族をお招きしての行事を行っているが、ご家族に参加頂けない事が多い。行事にご参加して頂けるように、案内を差し上げ、面会時にも口頭でお伝えしている。また、毎月、家族報告書やお便りを送付して、利用者様の日常の様子をお伝えしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの関係を継続したいと考えているが、入居されている方も高齢になり、また、関係を築いてきた方々も高齢になり、現状では難しくなってきている。しかし、今まで通っていた床屋や美容院などは継続して通えるようにしている。	事業所近隣に住む高齢者の訪問があるほか、利用者が外出した際には、近くの民間事業所や馴染みの床屋などから連絡があり、地域の方々も新たな馴染みとなっている。利用者の中には、定期的に自宅を訪問する方もいるほか、遠方の家族には電話を取り次ぐなど交流の機会確保を支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者様同士が助け合い、声を掛け合っている。食事や水分を残している方に、声を掛けて、出来ない事を補う関係が築けている。天気が良い日などは、お互いが声を掛け合い、散歩や苑庭での日向ぼっこを行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後に、新しい環境での不安や相談事などをご家族からお聞きし、フォローを行っている。現在も、退所されたご家族から、利用者様の近況報告などを受けている。		

令和 2 年度　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2 自己評価および外部評価結果

事業所名 ： グループホーム さくら花泉 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	モニタリングやアセスメントの時は勿論、日々のかかわりの中で、ご本人の考えや希望、本当の気持ち汲み取るように努めている。外出や外食の希望は、出来る限り叶えるようにしている。意思の疎通が難しくなってきた方にも、家族から情報を得て、問いかけを行い、表情などから思いを汲み取るようにしている。	帰宅願望者には、職員が後に付き添い周辺を散策することにしている。刺身や土用の丑の日のかば焼きなどの希望に応えるために出前で対応したり、外出の要望には、法人で所有する海岸の保養所に案内することもある。家族同伴でお盆の墓参や親戚の葬儀に参加する利用者もいる。事業所内でのお手伝いは、利用者の能力に応じて役割を分担している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に、ご本人やご家族から生活歴などの情報を頂いている。病院や居宅のケアマネからも、病歴や生活歴、これまでのサービスの支援経過などを頂いている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	体調や日々の細かい出来事を、朝礼や申し送りできちんと次の職員に伝え、合わせて、ケース記録や申し送りノートに記録をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の希望やご家族の意向を踏まえ、プランを作成し、その時の状況に合わせ、プランの変更を行っている。ご利用者には、担当の職員がおり、日々の変化などを、ケアマネと相談しながら、アセスメントやプラン作成を行っている。また、退院後など、状況が大きく変わっていることもあるので、必要に応じて入院中の状態などを看護師に確認しプランを作成している。	介護プランは、6ヵ月ごとに見直している。居室担当者とケアマネが協議して計画の原案を作成し、ケアマネがアセスメントを行った上で、毎月の職員会議での全体協議を経て計画の成案とし、利用者や家族の同意を得ている。医療機関退院後の状況変化があった場合には、事業所の看護師(非常勤)の助言も得て柔軟に計画を変更することとしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を個別記録に記入し、１日の様子がわかるようにしている。担当職員は月末にご家族に報告書を書くために、職員同士で情報の共有も行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	どうしても、施設内でサービスが完結しがちになってしまっている。本人様やご家族様の要望に、柔軟な対応を心掛けているが、状況によっては介護保険以外のサービスについても提案させて頂いている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事に参加することは勿論、ホーム内の行事を増やし、老人会や地域の方々にご参加頂き、共に楽しんで頂けるように努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前のかかりつけ医に、入居後も通院できるようにしている。通院が困難になった方は、往診専門のクリニックで対応している。また、主治医がいない方や、家族の意向で施設近くの医院などに変更する時にも、前の主治医より紹介状を頂き、利用者様が困らないように支援している。	従来からのかかりつけ医への受診には、事業所の管理者、事務長及び看護師等の職員が同行して受診している。受診結果はその都度、家族にも連絡しているほか、職員間で情報を共有している。眼科、皮膚科、精神科なども同行受診しているが、入院が必要な場合は、家族が同伴している。歯科は花泉地区の協力歯科医で受診している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に1～2回、事業所の看護師が来ている。事業所の看護師は他施設を巡回しており、利用者様の状態は、職員から伝えられ、状況の変化に関しても把握が出来ている。また、訪問クリニックでは、24時間体制が取られているので急変時の対応も速やかに出来ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	医療機関に情報提供をするとともに、早期に退院できるように働きかけ、リロケーションダメージが少ない状態で戻れる様に努めている。入院中も面会に行き、病棟看護師から、状態を聞き、退院後の生活に支障をきたさない様に努めている。現在はコロナの影響もあり、出来るだけ入院しないように、早め早めの対応を心掛けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態の変化に合わせ、家族と連絡を取り、必要に応じて往診に切り替えて頂く事もある。ご家族は治療を優先するのか、住み慣れたところで最期を迎えるのか、考えて頂き、意向に沿った対応を行うようにしている。ほとんどのご家族様は、施設での看取りを希望され、それに伴い、往診専門クリニックで往診をして頂いている。	終末期には、かかりつけ医、隣県の訪問診療専門医と連携して、事業所として終末期ケアを行っている。重度化した場合には、改めて家族等の意向を伺い、病院への入院、或いは必要に応じて事業所内の特別室を活用し、家族が宿泊するなどして看取りを行っている。職員の対応については、職員間で話し合い対処している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応についての勉強会を開催し、日頃から、急変時はどういう対応をしたら良いか話し合いを行っている。		

令和 ２ 年度　　　　　　　　　　　　　　　　　　　２ 自己評価および外部評価結果

事業所名 ： グループホーム さくら花泉 A棟

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、消防署立ち合いのもと、自動火災通報装置を使用しての避難訓練を、職員、ご利用者様とで行っている。また、水害時の避難場所や避難経路の確認も含めて、災害時の研修も行っている。	避難訓練は、年2回、運営推進会議委員の参加、協力を得て実施している。事業所所在地は市のハザードマップでは災害の指定地域とされていないが、市指定の避難場所が低地にあることから、独自に高台の高校等を避難場所として想定している。災害に備え、食料を数日分確保している。事業所の電力は、ソーラー対応となっているが、必要に応じ本社備蓄の発電機を使用することとしている。	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護の研修を行い、言葉遣いや個人情報にかかわる話題には細心の注意を払っている。職員同士の会話で、個人情報を扱うような会話の時には、話す場所や声のトーンに注意している。書きかけの書類は必ず片付けてから、席を離れるようにしている。	職員の研修会を開催し、プライバシー保護の意識を醸成している。居室の入室はノックを励行し、話しかける際は、利用者の目や耳の位置に配慮している。トイレやお風呂での異性介助に特に問題を生じていないが、利用者の要望があれば同性介助で対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定が可能な利用者様と、決定が難しい利用者様に分かれてしまっているが、声掛けや選択肢を少なくして、自己決定できるような支援をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご利用者のペースや状況に合わせて、好きなように過ごしてもらっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	朝の洗面後、ワセリンなどで保湿を行い、身だしなみを整える支援をしている。また、男性利用者様は、毎日、ひげそりを行えるようにし、女性利用者様は、電気シェーバーで、顔の毛の手入れをしている。		

令和 2 年度　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　２ 自己評価および外部評価結果

事業所名 ： グループホーム さくら花泉 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	以前は、月に1度、何を食べに行きたいか利用者様に伺い、外食をしていた。ホットプレートでお好み焼きや焼きそば、畑のニラを刈り、利用者様と職員で一緒に餃子を作り、食べていたが、現在はコロナの影響で、何も行えない状況が続いている。	食事メニューは、職員が1週間交代で献立表を作成し、食材はお店から購入するほか、菜園の野菜も活用している。利用者は、食材の前処理、茶碗拭き、テーブル拭きなどのお手伝いをしている。利用者が希望する食事を叶えるため、お弁当や出前のほか、月1回寿司屋や食堂などで外食していたが、コロナ禍のため、現在は見合わせている。例年、事業所のお祭りで、流しソーメン、焼肉、とうもろこしなどを提供していた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	持病や塩分制限をさせている方には、医師の指示に従った、食事を提供している。ストレスが掛からない様に、盛り付けや味付けを工夫し、他の利用者との差がないように気を付けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床後、毎食後に、声掛けや介助を行い、口腔ケアが出来るように支援している。口腔ケアの研修にも参加し、口腔ケアの重要性を理解してもらい、毎日のケアに反映させている。また、うがいだけではなく、必ず洗口液で口を漱いでもらうようにしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	寝たきりの利用者様以外は、基本的にはトイレでの排泄を行っている。排泄表を確認し、失禁する前に誘導を行うようにしている。排泄に失敗した時でも、必ずトイレに座ってもらい、排泄の意識付けを行い、、自立を促している。また、パットも利用者様の状況に合わせた物を選び、皮膚疾患の予防も図っている。	排泄表により、利用者の仕草や動きをみて、トイレに職員が誘導している。失敗した場合でも、一度はトイレでの排泄を促し介助している。事業所全体で布パンツを使用している5名が自立している。その他にオムツ使用者が1名、リハビリパンツとパットを利用している利用者が12名となっている。夜間にポータブルトイレを利用している方はいない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便確認表により、個々の排便リズムを把握。体が動く方には体操や運動を行ってもらい、、それ以外の方は主治医より処方されたマグネシウムで排便を促している。薬だけではなく、水分や乳製品も取り入れ、自然排便ができるようにしている。		

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 ： グループホーム さくら花泉 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日、入浴できるように準備を行っている。利用者様は週に3回、入浴ができるようにし、菖蒲湯やゆず湯など季節行事に合わせた支援も行っている。時には入浴剤なども使用し、温泉気分を味わってもらうようにしている。、車いすの方でもリフト浴を使用し、安心して入浴が出来るようにしている。	利用者の入浴は、週2、3回、午後をレクリエーションの時間としているため、午前中に対応している。車イス利用の5人はリフト浴としている。入浴を嫌がる利用者はいない。入浴剤のほか、季節により菖蒲湯、ゆず湯を提供するなど、楽しく入浴できるよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の睡眠に影響が出ない程度に、自分のタイミングで、休息を取ってもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書が個人ファイルに綴じてあり、いつでも確認できるようになっている。変更があった時には、口頭で申し送り、個人ファイル、申し送りノートに記載。副作用の確認に努め、異常が認められた時には医療機関に連絡を行う。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者様自ら、自分で仕事を見つけ、習慣化されている。自分でできない事でも、他の利用者様が行っているのを見て、手伝いをされようとすることもあり、出来なくても失敗しても、やって頂き、満足感を得てもらえるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナの影響で施設外に出掛ける事が出来ていない。家族と自宅に行く事やお墓参りなどは、希望に沿うようにしているが、外出の条件として、外食や他の方と密にならないようにとのお願いをしている。車いすの利用者様に関しては、住宅環境や迎えの車の都合もあり、外出は困難となっている。	天気の良い日は、広めの前庭での散歩のほか、花への水遣り、草取り、庭掃除、事業所裏の畑での作業を手伝ってもらっている。通院の帰りにスーパー、コンビニになどで買い物する利用者がいるほか、食材の購入時に同行する利用者もいる。年2回法人の海の保養所にドライブし、地域の夏祭りや互い市の見学にも外出していたが、今年は新型コロナの関係で自粛している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	紛失や盗られたとの訴えがあると困るので、お金の持ち込みはお断りをしているが、会社から、利用者様の為に使えるお金を頂いているので、買い物に出かけた時には、そちらのお金を手渡し、自分で購入し支払いをしてもらうようにしている。		

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 ： グループホーム さくら花泉 A棟

自己	外部	項 目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	外部評価 次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時には、いつでも電話を使用できる。また、家族からの手紙は直接、利用者様に手渡している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり、行事の写真の掲示、季節に合わせた飾りつけなどを行っている。ソファーも準備し、くつろげる空間を作っている。トイレと居室が分るように、目線の高さに合わせ表示をしている。リビングの席は、利用者様同士の相性を見ながら、状況に応じて席を変え、落ち着いた時間を過ごせるようにしている。	高い天窓から陽光が差し込む広い共用空間は、大きな引き戸で開放感があり、利用者は食事用テーブルやソファーなど、思い思いの場所で寛いでいる。壁には手作りの作品やひな祭りなどの季節の飾りが掲示されている。床暖、エアコンで室温を管理し、掃除が行き届き、整理整頓された清潔感ある快適な居住環境となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	おしゃべりをしたり、テレビを見たりしながら過ごされている。リビングに来ると安心するのか、深い眠りに入る方もおられるが、利用者様同士、あまり干渉する事もなく、各々の時間を過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していたタンスやテレビ、布団など、自宅にいる時と同じ物を使う事で、混乱を少なくしている。居室の壁は、自由に飾りつけが出来るので、天皇陛下が写っている新聞を張っている方もおられる。収納スペースも各部屋によって違い、衣装ケースを使用してい方もいる。居室は日当たりも良く、明るい空間になっている。	冬場の暖房は床暖房となっているが、西側の居室にはヨシズ、北側の居室にはエアコンを設置している。ベッド、クローゼット、洗面台が備えられ、テレビ、ラジオを持ち込み、家族写真、手作りの塗り絵などが飾られている。利用者の意向に沿った居心地のよい居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの残存機能を生かし、必要な時に、必要最小限の介助を行い、自律した生活が続けられるように支援していく。利用者様自身が、望む生活に近づけられるような支援を心掛けている。		